

# 東洋文化と西洋文化の比較

——“天人合一”という視点から——

馮 富榮

はじめに

最近、国際的なテロ事件や、民族紛争、あるいは宗教文化の衝突事件が世界の多くの地域で起こっている。平和的な社会を望んでいる世界の人々にとって、実に心の痛ましいことである。こうしたことを背景に、文化間の違い、宗教間の違いを比較し、それによって相互の理解を深めることが非常に重要となっている。本論は、まさにこうした時代の要求に応じて書かれたものである。本論では、主として儒教の“天人合一”という視点から東洋文化と西洋文化の違いを比較し、その違いを生み出した歴史的背景を検討している。本論を通して、東洋人と西洋人のさらなる相互理解に、また多文化の共存できる平和的な社会の実現にすこしでも貢献できればと期待している。

## 一、古代の中国人と日本人の天地への崇拜と日本の前方後円古墳

3世紀から8世紀にかけて、東アジアでは、「天は丸く、地は四角」という考え方が流行っていた。中国の古典の《大戴礼記》の中に、曾子が弟子の単居の質問に答えた記述があった。それは“参学闻之夫子曰：天道曰圆，地道曰方。”とある。この記述からも、古代の中国人の中では、「天は丸く、地は四角」という考え方が浸透されていたことが伺える。ゆえに、中国古代の皇帝の礼服の冠の形も「前円後方」になっていた。また古代の車も上は丸く、下の台は四角というような形に設計されていた。

科学技術がまだ発達していなかった古代では、祭祀活動は非常に大きな行事となっていた。豊作、病気の完治、そして戦争での勝利などへの祈りは、すべて祭祀活動を通じて行われていた。ゆえに、当時の祭祀活動は時期から祭品まで、さらに祭祀活動を行う場所までもきわめてこまかく設定されていた。たとえば、冬至の日に天を祭り、夏至の日に地を祭る。またもっとも貴重な祭品とされる玉の中にも丸い形をしている“蒼璧”と四方形をしている“黄琮”があるが、丸い形をしている“蒼璧”は天を祭るときに使われ、四方形をしている“黄琮”は地を祭るときに使われるように規定されていた。中国では、周の時代から、音楽を演奏する場所として“円丘”と“方澤”が現れてきた。冬至の日に、“円丘”で音楽を演奏し、夏至の日に湖の真中の“方澤”で音楽を演奏する。その後、“円丘”と“方澤”は、徐々に天と地を祭る場所としてそれぞれ使われるようになった。たとえば、北京の有名な天壇公園は明・清両王朝の皇帝が天を祭るところであった。天を祭るところなので、その建物のすべては丸い形をしている。

古代の日本にも天を崇拜する考え方があったことが《古事記》や《日本書紀》の記載から伺えることができる。ゆえに、天照大神が皇祖と見なされ、天の神様であり、いわゆる

天皇の祖先でもあると見なされてきた。《日本書紀》にはこういった記載があった。“天生黎庶，樹以元首。”この“元首”は“君主”をさすものである。つまり、天様は庶民を作り出し、そして庶民を統治するために、君主を立てた。ここからは“天、君、民”という儒教の思想が6世紀の日本皇室の中にも浸透していたことが伺える。

日本の前方後円古墳を見てみると、大多数は、前方部は低く、後円部は高いという特徴を持っている。これは「天は高く、地は低い」という考え方の反映ではないかと想像される。また埋葬された死体の場所は大多数が前方部にはなく、後円部にあることも分かる。これは埋葬されている人の多くは地位のある、いわゆる「天子」であるので、もともと天から降りてきた「天子」が亡くなったあと再び「天国」に戻るということを意味しているものではないかと考えられる。もっと面白いことは、中国古代の皇帝の冠は「前方後方」という形をしていた。日本の「前方後円」古墳の形と正反対である。これは、皇帝はもともと丸い天から四角い大地に下りてきた「天子」であることを意味しているものではないかと想像してしまう。いずれにしても、これはきわめて興味深い現象であり、“天”と“人”との関係に中国文化と日本文化との共通点ないし原点が伺えるように思われてならない。

## 二、“天人合一”に基づく東洋の“融和”と西洋の“主体と客体の分化”

東洋文化の源流は“天人合一”にあると思われる。“天人合一”とは、人間界と自然界との“融和”を求めるものである。この“天”は決して「空」という意味ではなく、自然界や自然の法則、天命などを指すものであり、また人間としての最高の理想状態を指すものでもある。この“天人合一”という思想に基づくと、「天」と「人」との関係は、人間の内的な本性と自然の普遍的原理との関係であり、二者は基本的に一致しているので、その間に根本的な違いはないとされている。つまり、「天道」は「人道」の前提と基礎を成すものであるので、「人道」は「天道」に従わなければならないのである。

古代の東洋では、農作物が豊作となるか否かはまったく自然界の“意志”によって決められるという考え方が一般的であった。ゆえに人間は自然界の力が絶対的に大きいものとされ、それに逆らってはいけなく、その代わりに自然界との“融和”を求めなければならないと考えられていた。道教のいわゆる“天大人小”はそういう考え方の典型的な反映である。道教の庄氏は嘗て以下のように話したことがある。“吾在天地之间，犹小石小林之在大山也。”つまり、「自然界と比べれば人間は、まるで大きな山の中の小さな石や小さな木のような存在だ」ということを言っている。要するに、古代の東洋人にとっては、自然界の力は至上のものである。孔子によると、“唯天為大，唯堯則之”という。つまり、孔子から見ると、自然は至上のものであり、人間は、自然の法則に従って行動を取らなければならない。それを孟子の言葉で言い換えると、“順天者昌，逆天者亡”である。ここで強調されていたのは、人間と自然界との“融和”である。

それと対照的に、西洋人にとっては、人間は主体であり、自然界は客体となる。人間は客体を冷静に観察し、把握しなければならないと考えられている。しかも、人間は、客体

との“融和”を求めるところか、客体を改造すべきだとされている。ゆえに、人間は、外部の世界に服従するのではなく、外部の世界と戦わなければならない。いや戦うだけでなく、外部の世界を征服しなければならないのである。これを可能とする前提は、いわゆる“主体と客体の分化”にある。ゆえに、西洋社会では人間の力が至上のものとなり、それによって外部の世界が征服されている。西洋の歴史を概観してみても、人間の力の誇示が貫いてきていると言える。

上記した自然界に対する考え方の根本的な違いから、東洋人と西洋人の間に以下のような相違点が生まれた。

### 1) 精神の追求と自然の研究

東洋人は完璧な精神状態を追求しようとしているのに対し、西洋人は自然の研究を極めようとしている。この違いが以下のような現象として現れている。

#### ① 実用的と科学的

古代の中国では多くの発明がなされてきた。たとえば、有名な4大発明と言われている造紙術・火薬・羅針盤と活字は、どれもこれも実用的なものであり、技術面では優れていても科学的に立証されたものが少ない。一方、西洋でも、多くの発明がなされてきた。たとえば、有名なダービンの進化論やニュートンによって建設された力学体系などは、いずれも科学的に立証されたものである。

#### ② 経験的と理論的

中国の伝統的な学問は経験的にまとめられたものが多い。たとえば、有名な漢方医学がその典型的な例である。現在の漢方医学の財産は、おおくの漢方医学の学者による献身的な経験の上に蓄積されたものである。彼らは、いろんな薬草を自ら服用し、その効用を自分の体をもって実験し、命がけで研究していた。漢方医学の本として世界的に評判となっている《本草綱目》があげられる。その著者である有名な李時珍が、中国の山々を歩き回り、数々の薬草を食べ尽くして、その体験を丹念に書き上げたものは、すなわちあの有名な《本草綱目》であった。この本に記載されている処方箋は見事に難病を治療することができるが、理論的に説明できるものは少ない。そうしたすばらしい処方箋をいかに理論的に説明すればよいかをむしろ現在の漢方医学の課題となっている。一方、西洋医学の治療法は科学的な理論によって導かれるものである。ゆえに、同じ病気でも、漢方医学と西洋医学とでは治療法が完全に異なる可能性がある。たとえば、同じ熱を出したとしても、西洋医学では熱を冷ますところから着手するが、漢方医学では体内の悪い熱を出させ切るようにさらに熱を加えるという治療法を取る。また、同じ親から「何と何を一緒に食べるとよくないよ」と言われたとしても、東洋人ならおそらく多くの人がそれを上の世代からの経験として覚えておくのに対し、西洋人ならきっと「どうして?」、あるいは「なぜ?」と聞く人が多いであろう。よって、東洋文化では“行重于知”(知識より経験を重んずる)であるが、

西洋文化では“知重于行”（経験より知識を重視する）である。

## 2) “善” と “真”

“真・善・美”を求めるのは、人類の共通するところである。でも、西洋では“善”よりは“真”のほうをより追求しているのに対し、東洋では“真”よりは“善”のほうをより大事としている。ゆえに、東洋の哲学は「倫理の哲学」といわれ、東洋文化は「倫理の文化」と言われている。孔子が、“中庸”を提唱しているが、それは“真”に基づくものではなく、まさに“仁”と“善”に基づくものである。彼は、《論語》の中で次のように指摘している。“中庸之为徳也、其至矣乎”。つまり、「“中庸”とはすなわち“徳”であり、しかも“徳の極まり”である」ということを言っている。孔子のこういった思想が古代の中国人だけでなく、古代の東洋人に大きな影響をもたらしている。要するに、古代の東洋人から見れば、“仁”と“善”の境地にいたってはじめて、“天地合一”の境地に達することができるのである。つまり、“天地充滿了仁、人若能仁、天人之間自無対、必然融為一体”ということである。これを日本語におおまかに訳すと「天と地の間に善がいっぱい満ちている。もし人間も善をなすことができれば、天と人は対立することなく、自然と一体と融合することができる」というような意味である。

一方、西洋では人間と自然との融合を求めるのではなく、むしろ、人間と自然を二分化し、人間を主体とし、自然を客体とする。しかも、主体としての人間は、常に客体としての自然を冷静に見つめ、そこに潜んでいる自然の真実、自然の真理を求めようとしている。ここの真実と真理は、人間のなすべき“仁”と“善”とまったく違った次元のものである。西洋文化では、自然界の真実を求める過程の中で、真理を得ることができるとされている。そこから得られた真理は自然界を征服する力となる。人間は自然界の解釈者のみでなく、自然界の改革者でもある。それと対照的に、東洋文化では、“仁民而愛物”が唱えられている。いわば、“仁”と“善”は高く評価され、自然界にある自然のものを大切にしなければならないと思われている。

## 3) “直感・悟り” と “推理・分析”

東洋文化の特徴を為す“天人合一”に基づく、自然界は人間から独立された客体ではなく、人間と融合のとれている状態を保つものである。あるいは人間は、その融合のとれている状態を保つように行動しなければならないと言ったほうが適切であるかもしれない。“天人合一”の精神によって追求されているのは、客体の本質の抽出や普遍的な原理の発見ではなく、理性や感情、また意志などの心的機制に基づく外界への直感的、感性的な悟りである。西洋文化では外界を細かく分解して冷静に観察しようとしているのに対し、東洋文化では外界を全体的に、また感情的に把握しようとしている。ゆえに、“直感と悟り”よりは“推理・分析”を大事にする西洋文化と違って、東洋文化では“推理・分析”よりも“直感と悟り”が重んじられている。中国の道教の“賽其兌、閉其門”というのは、ま

さにこのことを言っている。つまり、「心に住み着く外界の埃を取り除いて、内心の最大の静寂と空間を保ち、内心の悟りによって外界の世界を直感的に把握する」ということを言っている。

儒教によると、「故人者、天地之心也」という。これは、「天・地・人」のなかで、人は核心を為す存在である」ことを意味している。この場合の人は、まるで人体の心臓のような存在であるので、天と地を統合し、うまく起動させるのに大きな役割を果たすものである。西洋人は、一般的な法則などを綿密な言語で概念化することを好むが、東洋人は、「言不尽意」を信じている。つまり「知者不言，言者不知」（知っている者は言わないが、言う者は逆に知らない人だ）ということである。庄氏は、嘗て以下のように話したことがある：「語之所貴者意也。意有所随，意之所随者，不可以言传也。」このような主張は「言語は、認知活動をありのままに表現することができる」という西洋人の理性主義と真正面から対立するものである。

ゆえに、東洋人は、常に“直感”によって自分の内的世界と自分を取り巻く外的世界との関連を悟ろうとしているのに対し、西洋人はつねに“推理”によって自分と切り離れた外的世界の法則を分析しようとしている。東洋文化では「以心伝心」が重んじられ、「言不尽意」が常識として知られているのに対し、西洋文化ではむしろ「以言伝意」、「言能尽意」となるように工夫されている。つまり、いかにして正確に、なおかつ厳密に言語を以て意味を伝えることができるかが西洋文化での大きな課題である。また東洋の哲学は人間界と自然界との融和に立脚しているので、自然界からも人間の感情を読み取ろうとしているのに対し、西洋の哲学は自然界への追及に源をもっているため、人間界と自然界を混同させてはならないとされている。ゆえに、客体を主体から分離させなければならない。それによって、自然界を主体の思考の対象とすることができ、人間は主体的に、また客観的にそれを分析することができるのである。

#### 4) “義理” と “功利”

外界を客観的に分析し、そこに潜んでいる真実や法則を追求しようとするのが西洋文化の特徴と述べてきた。その目的はもちろん自然界を征服し、あるいは改造することにある。つまり、自然界をよりよく人類の発達に寄与させようとしていることである。このことから、「義理」よりは、実際の“功利”を求めるといふ西洋人の価値観が生まれてくる。西洋では、人間の行動を判断する基準は、それによって幸福がもたらされるか否かにある。そこで幸福は、人類の行為を行うときの最大の目標となっている。

一方、東洋では、“功利”よりは“義理”のほうがより重視されている。人間の行動を判断する基準は、そういった行為は“義理”にかなっているか否かにある。孔子は、嘗て「君子喻于義，小人喻于利」と言ったことがある。ここでは、“利”を“義”と対立するものとして扱っており、“義”が最高の道徳価値として位置づけられているのに対照的に、“利”が悪いものとして軽視されている。要するに、東洋社会では、孔子の“君子義以為質、君

子義以為上”という考え方が一般的に受け入れられているようである。

孟子も次のように主張したことがある。それは“何必曰利？亦有仁義而已矣，由仁義行。”ということである。つまり「功利なんか考える必要はない。義理を基準にして行動をとればよい」ということである。とにかく儒教の教えによると、物質的な“利益”は人間の低いレベルの要求であるが、精神的な“義理”であってこそ人間の高レベルの欲求だという。この理論に基づくと、“利益”が“義理”と衝突したとき、“利益”を切り捨てて、“義理”を取るべきである。“義理”に合わない“利益”が人間にとって有益となるどころか、むしろ有害なものとなる。人間は、人生の目標として“利”を追求するのではなく、いかにして“義理”を果たすことができるかを求め続けるべきである。

上記した西洋の“功利重視”と東洋の“義理重視”の違いからまた以下のような違いが生まれてくると考えられる。

#### ① “個人”対“家族”

古代ギリシャの三面は海に面しているの、航海交通は非常に発達していた。そのため、人々の移動は頻繁に行われていた。ゆえに、固定した形の大家族の形成が困難であった。そうした歴史の背景から個人を基本単位とする倫理観念が生まれたと考えられる。個人の自由や社会に対する個人の責任を求めることも西洋のそういった倫理観に由来すると言えよう。とにかく、西洋では、個人の幸福は人生の価値の最大の目標とされ、個人主義は西洋人の価値観の核心とされている。つまり、個人主義は、西洋の社会制度や文化習慣及び民主政治の中に浸透され、封建社会や宗教の秩序と戦う有力な武器として使われてきている。それを土台にして、個人の権利や尊厳、そして個人の自由と独立が提唱されている。

一方、古代の東洋は、早くも農耕社会に入り、そこで血縁関係で結ばれた大家族が誕生された。家族を基本単位とし、孝行を基本とする倫理観念が家族を維持し、守るための必要性から生まれてきたと考えられる。いわば、“欲治其国、先治其家；家齐而后国治，国治而后天下平。”ということである。また“父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦，而家道正，正家而天下定矣。”これは、「国の社会の秩序は、家の秩序に依存しているの、国を治めようとすれば、家を治めることから始めないといけない」ことを意味している。ここで、家庭は国の基本単位とし、家庭の秩序は国の秩序の基点を成すものとして見られている。このような理念の基では、家庭の利益が守られていたのに対し、個人の利益は無視されていた。ゆえに、家庭の利益は最優先に守られ、個人の利益は家庭の利益に従わなければならなかった。また両親が健在している限りでは、子供は私財を蓄えてはいけなかった。もちろん、家の財産を分けることもなおさら禁止されていた。

#### ② “個人主義”対“集団主義”

西洋文化では、すべての価値の中で、人間個人の価値が最高のものとなっており、個人の生活や個人のプライバシーを最優先して守らなければならない。権威や集団

の個人に対する支配が断然と反対されている。つまり、個人の利益を最重要視し、それを犯すことは許されない。要するに、西洋文化では、個人主義が強調され、個人の能力を最大限に発揮することが望ましいこととされる。競争を機軸とする西洋社会では働いているのが“強者勝、弱者敗”という原理である。そこで問われるのは、集団の利益をいかにして守るかではなく、いかにして個人の利益を最大に作り出すかであり、いかにして集団に協調するかではなく、いかにして個性を出すかである。またいかにして自分の力によって外部の世界に変化をもたらし、改革をもたらすことができるかは人生の目標とされている。西洋人から見れば、個人の権利などが侵されているような集団であれば、それを裏切って当然である。個人こそが社会における最高に守られるべき存在である。

一方、東洋文化では、人間がある行動を取るとき、まず考えなければならないのは、家族や自分の所属している集団の利益を損ねてはいないかということである。個人にとって利益となっても、集団にとっては不利益になるなら、やらないのが東洋文化での美德である。個人の欲求を抑えて、他人の幸せ、社会の安定に貢献しようという犠牲の精神が昔から東洋文化では提唱されてきている。孔子の言っている“修己以安人”は、まさにこの精神を提唱するものである。これは、「自分の欲求や利益を抑制することによって、人の安定と幸福をもたらすことができる」ことを言っている。また範仲淹の“先天下之憂而憂、後天下之樂而樂”という名文もあげられる。これは「自分のことで喜んでいたり、憂いしたりしてはいけなく、みんなのことを先に考えなければならない」という意味である。

要するに、東洋文化で培われているのは個人主義ではなく集団の団結力であり、自己主張ではなく集団の協調精神である。これが東洋人の人格形成においておきな役割を果たしているだけでなく、東洋の社会組織の運営にも非常に貢献していると言える。とにかく、東洋社会では、追求されているのが個人の利益ではなく集団の利益であるので、集団への忠誠心が人間の美德として高く評価されている。

### ③ “義務” 対 “権利”

西洋では、もちろん“義務”も問われるが、しかし“義務”よりは個人の“権利”を最優先に求められる。1789年のフランス革命の《人権宣言》でも、1775年のアメリカの《独立宣言》でも、みな個人の権利が主張され、国や法律から無条件にそれを守らなければならないと規定されている。西洋では、他人の権利を侵さないで、守ることはすべて“善”である。要するに、西洋社会では、個人の権利が最大限に守られているので、個人対個人の利益が衝突することがしばしばあると考えられる。そのため、相互に独立し、平等の立場に立つ個人間の相互の利益を実現するためには契約関係を結ぶことが必要となってくる。この契約関係は個人の権利を守るための保障となり、社会の秩序を成り立たせる機制となる。これはすなわち法律憲法である。とにかく、個人の権利を守ることが西洋社会を運営するための中

心的な任務であり、法律の効力を示す最大の武器である。ゆえに、西洋社会の秩序の確立は、外的な法律の力によるものだと言える。

一方、東洋では、個人の“権利”よりも、個人の果たすべき“義務”が提唱されている。権利ばかり主張して、義務を果たそうとしない人は悪と見なされる。それと対照的に、他人のために、家族のために、また社会のために、献身的に義務を果たそうとする人は社会から高く評価を受ける。《礼記・礼運篇》には“何為人義？父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長恵、幼順、君仁、臣忠、十者謂之人義。”と書いてあるが、そのいずれも、個人の権利ではなく、個人として果たすべき義務を強調するものである。ゆえに、長男が家を継ぐことや親孝行などは、西洋社会では通用しないかもしれないが、東洋社会では子供の義務として一般的に求められている。とにかく義理によって強調されるのは、他人や社会に対して果たすべき責任である。ゆえに、東洋社会では人のために何かをやってあげてその人から感謝されたとき、「やるべきことをやっただけ」と返事しても何も不思議なことはない。しかし、西洋人に同じように感謝の言葉を言われて、それを英語で「That's my duty.」と西洋人に返事したら、せっかく好意的にやってあげても、不愉快な気持ちにさせてしまうことになりうる。それは英語の「That's my duty.」という表現には「仕事だからやむを得ず」というニュアンスが入っているからだと考えられる。

##### 5) “外的開拓型”と“内的追求型”

西洋では、長期以来、「人は理性の動物である」とずっと見なされてきた。人間の理性は、すべてより勝るとされている。人間の理性によって、外界の世界を認識することができ、宇宙の謎を解けることもでき、また外界の世界を人間の意志のままに征服・改造することもできる。自然との長い戦いの中で、「探索・冒険と開拓をしてこそ、人生に意義がある」という価値観が形成されている。つまり、西洋人は、知識の獲得、真理の発見、科学の進歩、自然の征服、技術の発明、そして未知領域の探索と新しい領域の開拓を人生の最大の目標とする。コロンブの新大陸発見や近代歴史の植民地への支配などは、みなこのような価値観が反映されることであろう。要するに、西洋文化では、人間と自然が二分化されているので、人間と自然とは対立関係にあり、征服と被征服の関係にある。外部の世界を征服していくことによって、人間としての価値が実現されていく。

一方、古代の東洋では、農耕生活が主流であった。いわば、“日出而作，日入而息，耕田而食，凿井而飲”という生活が営まれていた。このような生活から生まれたのは、“内的追求型”に基づく価値観である。西洋人も東洋人も自由を求めているが、西洋人は、外界を征服し、外界を駆使しようという自由を求めているのに対し、東洋人は、自身を調節することによって自然と融合し、内的な融合状態と外的な融合状態という二重の融合を自由自在に操ろうとする自由を求めている。まさに孔子の提唱している“従心所欲不逾矩”である。つまり、「自分の意志を自由に発揮することはできるが、しかしそれは外界の法則を超



えないことを限度としなければならない」ということである。道教も精神の“逍遙遊”という自由を求めているが、それは外界を征服しようというのではなく、俗社会から離脱し、自然に回帰するものである。要するに、古代の東洋人は、常に内的な精神状態を高めようと努め、そこに人生の意義を見出そうとしていた。ゆえに、理性よりは道徳性が強調され、“成徳、成仁”、最終的には“成仏”の境地に達するとされる。“為仁由己”と言っているように、“仁”を為すには、まず自分の内的な素質の磨きからスタートする。

#### まとめ

以上、“天人合一”という視点から西洋文化と東洋文化を比較してきた。“天人合一”という考え方は、儒教の教えによるところが大きい。周知の通り、儒教は古代の中国のみでなく、古代の日本、韓国などの東洋社会においても、大きな影響を持ち、現在の東洋文化の基礎作りに大きな貢献を成したものと言えよう。西洋文化では自己主張が求められているが、東洋文化では自分を抑えて他人に配慮することが美徳とされてきた。これはまさに儒教の教えに基づくことである。ゆえに、同じ「暑いな」と感じて窓を開けたいと思っても、西洋人と東洋人の意志表示の仕方に違いが出ると考えられる。西洋人は、「とても暑いですね」と自分の状態を主張し、相手に気づいてもらうことを狙うかもしれないが、東洋人は、きっと「暑いですか」とまず相手の気持ちを探るのが一般的だと考えられる。ゆえに、文化習慣が違っていると、表現習慣も取る行動も違ってくると思われる。

しかしながら、表現習慣や取る行動が違っていても、文化には優・劣はないことを本論で強調したいのである。どちらの文化にもそれなりの歴史背景があり、それなりの理由がある。またどちらの文化も人類のすばらしい財産であり、誇るべきものである。西洋では平等と権利が一番大事とされるが、東洋では自分の利益を犠牲にしても集団の利益を守ることに、他者や社会に果たすべき義務が一番大事とされる。われわれは、西洋のすばらしい文化を取り入れるとき、その真義を理解するように努力することが大切である。自分にとって都合のよい解釈で取り入れてはならないことを忘れないように願う。ほんとうの“平等”と個人の“権利”とは何であるかを原点に立ち戻って考えて取り入れるべきである。と同時にわれわれの文化を他人に押し付けないように願う。そうすることによって、多文化の共存できる平和的な国際社会を迎えることができると信じている。

#### 参考書

- 唐 凱麟・曹 剛 2000年 『重積伝統儒家思想的現代価値評価』 華東師範大学出版社
- 王 金林 1996年 『漢唐文化与古代日本文化』 天津人民出版社
- 向 世陵ら 2000年 『中国哲学知恵』 中国人民大学出版社
- 趙 永新ら 1997年 『漢外語言文化对比与對外漢語教学』 北京語言文化大学出版社
- 朱 立元・王 振復ら 1998年 『天人合一 中華審美文化之魂』 上海文芸出版社